



飛翔な日々

編集委員自身の考えを発信したい。それが、このコーナーを立ち上げた動機です。前号に引き続き、今回もたくさん作品が集まりました。『飛翔な日々』第二弾、編集委員有志によるエッセー集です。

稲村 円

小学生の頃、自分は赤い髪の毛カーになりたいと思っていました。今となっては理由すらわかりません。皆さんも昔はプロのスポーツ選手になりたいとか、政治家になりたいとか壮大な夢を描いていませんか？

現在私の将来の夢というのはハッキリしていませんが、確実に「ロツカーになりたい」とは思っています。夢は日々変わっていくものです。どんなに突拍子がなくてもどんなに平凡でも、自分が本当にしたいと思えることが必ずあると私は信じています。だから私の今の夢は、私の夢を見つけること。それでいいんじゃない？ こんな贅沢な時間を許してくれる両親に感謝の意を込めて。



ヨダカと名前

中村 洋平

先日、とある重大な事実に気がきました。それは、『鷹の爪』は唐辛子の一種だったということです。

え、そんなの当たり前ですって？

まあ、そう言わずに聞いてください。

なんだかペロンチノが食べたい気分だったんです。そこで、早速ネットでレシピを調べて材料を確認したのですが、そこに知らない食材ひとつ……

え、鷹の爪？？？

ああ、なるほどね。日本でも昔鷹狩りとかしてたし、その鷹の爪を細かく刻んでとか……んなわけあるか！ とひとり突っ込みを入れて、その時は結局なしで作りました。

その日の晩、それをブログに書いたところ、後日、実家から冬服とともに唐辛子らしきものが。そして、僕の第一印象は、竜の爪かと思ったというアホらしさで、煎じ方なんてものを調べたりなんかして……。

結局メールで確認を取るとどうやらそれが鷹の目……じゃなかった、鷹の爪らしいのです。(ミホークじゃないですからね)

はい。

しかし、まだその時点で鷹の爪＝唐辛子という方程式の証明は僕の中で完了していませんでした。

しかし……聞けない。誰にも聞けない。なにせ、もしかするとそれは世間の常識で、知らないのは僕だけなのかもしれない

飛翔な日々



のですから。周りすべてが敵に見えます。そして、敵に見えるからこそ、案外周りが見えていないのです。自分の体を丸く縮めて、弱みを隠して歩くからこそ、死角が、隙が増えるのです。結局その時は闇に葬られたのですが、このエッセイを書くにあたって、再び弱みがつつかれることとなったのです。そして……検索ワードに『鷹の爪 唐辛子』と打ち込んで、ぼちっとな。途端に十万件以上ヒットしましたが……僕の問題解決はまだ先のようにです。

ピーターパンのしゅうまつ

中村 洋平

大学生活にも慣れてきた今日この頃、気になることがあります。バイト先での出来事です。

「コーチ何歳?」「十九歳だよ」「なんだ、まだ子どもじゃん」「そんなことないよ」

子どもにそう言われて、口ではそう答えたものの、ドキッとなりました。

きっと僕はまだまだ子どもなのです。

あれよあれよという間に、小学生だった僕は大学生になりました。

大学生は人生の週末だと思っただけは何時まで寝ていてもよかったです、ずっと自由な時間でした。そして今、僕は使いたい放題に時間を使っています。ずっと週末です。しかし、来週の僕はもう社会人なのでしょう。毎日忙しなく働いているのでしょうか。

高校の頃、大人には絶対になりたくないと思っていた時期が

ありました。大人は自分の言いたいことを言えない。我慢すること、夢を諦めることが大人の証だと思っていた時期がありました。しかし、最近ようやく大人ってそういうものじゃないのだ、と思い始めた自分がいます。一年生の僕は、どこへ行っても子どもなのです。誰を見ても高い、大きいのです。井の中の蛙大海を知らず、飛び出してきた、高層ビル群を見上げています。『大人』って、『大きい人』と書くのですね。最近そんなことを思いました。

子どもの象徴としてよく上げられるのがピーターパンですね。しかしピーターパンは子どもであるからこそ決して正義ではないのです。彼の正義はあくまで彼のための正義であって、普遍的なものではないからです。そして、実はフック船長は紳士的なのです。子どもであり続けるピーターパンはどんな気持ちでフック船長と同じ舞台に立ったのだらう、と考えてしまいます。僕の足が竦んでしまう

その舞台に。

これを書いていて十一月某日、冬の足音がひたひたと朝の冷たい床の上から聞こえてきます。

僕は徐々に服の重ね着に走り始めました。

しかし、飛翔七十三号が刊行される春、きっと今度は徐々に厚くて重い服を脱いでいるのでしょう。はたして脱皮した僕は一回り大きくなっているのでしょうか。



川村 真弓

お腹が減ったら食べるように、心がスカスカしたらエクササイズをしたら良い。

好きな服を着て、好きな人と、好きなことをする。

とにかく笑えれば、と私の大好きな歌手も歌っている。笑うための努力は必要だ。



きつね

小野 未千恵

何の動物が好きか、ペットに何を飼いたいかという質問なら答えを悩むところだが、物語に

出てくる動物ならなんといつてもきつねがいい。

きつねがいい、ときつぱり書いてみたものの、理由はよくわからない。なぜきつねがいいのだろう。

大体、きつねというのは童話や昔話では大抵がずるがしこくといやなやつだ。ウサギに甘い言葉をかけその肉を喰らい、ガチョウをだまからかして一家ごとペロリ。オオカミにうまい話があると持ちかけうまく働いてもらい、自分は甘い汁だけ吸う。だましてばっかりだ。とんでもないやつらである。

だがそこがいい。結局きつねが「うまくやった」のである。お見事、と言って拍手を送るしかあるまい。

しかし、デフォルトで「ずるがしこい」やつらであるが、痛い目にあうことも少なくない。きつねの策をみやぶる動物もいるし、坊主にはよくやられていく。なまじ知恵があり、普段からすましているやつらだから、惨敗を喫しすぎごと引き下が

る姿はみじめである。

だがそこがいい。

負けるきつね、実に結構。やつらに温度を感じ、いとおしく思う瞬間だ。「おい、がんばれよ」と声をかけたくなるではないか。

となると、「ずるがしこいけれどときに痛い目にあう」ところが惹かれるポイントなのだろうか。だとすれば現実世界で、失敗して落ち込んでいる詐欺師の男を見て、「きつねみたい！」と惚れてしまわぬよう気をつけなければ。

しかし、つんとすました鼻先と、トースト色のふさふさのしっぽがなければそこまで魅力を感じないかな、とも思う。

ちよつと待て。つまり自分はきつねの外見が好きなのか。ずるがしこくてときに痛い目にあうきつね以外も好きだとすれば、そういうことか。

確かに、間違えて母親に言われたのと逆の手を出してしまうきつねもよければ、立派な燕尾服を来て幻燈会に出るきつねも

いい。両の人差し指と親指を青色に染めてくれるきつねもよければ、拾った定期券でコロツケを食べに行くんだと主張するきつねもいい……きつねなら無条件でオーケーな気がする。

そうか私はつまるところきつねの外見が好きなのか。一種の面食いというわけか。しかし、だとすれば物語のきつねほどにはリアルなきつねに惹かれないのはどうしてなのだろう。

愚かな私に、誰か教えてはくれないものか。思いつつ、今も、眩く。

とにかくきつねはいい、と。



飛翔な日々



異国にて

五十嵐 太郎

あとは小野さんの指示に従ってください。

二〇〇七年八月月上旬、飛翔七十二号の製作が最終段階に入ったところ、メンバーにメッセージを残して、北京へ飛んだ。文学部の先生の、短期留学プログラムに参加したのである。ちなみにこの時、わたしの右腕たる荒川くんもすでにドイツだった。それでも飛翔の完成に関して、特に支障はなかったようだ。まあそれは良いとして、中国滞在

中に考えたことを少し紹介してみたい。

学習歴一年半のわたしの中国語は、うまく通じることもあれば通じないこともあった。もちろん、内容が高度になるほど通じない。しかしある時、話す相手によっても通じやすさに違いがあることに気付いた。語学の先生、知り合いになった大学生、列車の中で話した大学院生、こういった人達とは比較的言葉が通じた。逆に通じにくいのは、食堂の主人、バスで切符を売っている係員、列車の中で話したおばさん、こういった人達である。

この違いはどこから来るのか。ぱっと浮かんだのは、教養という言葉である。それが、先に挙げた人達を二分しているように思えた。相手に教養があるほど、言葉が通じるような気がする。

しかし、そこから先が解らなかつた。とりあえず学歴のありそうな人を教養のある人としたが、それと言葉が通じること

と、どう関係するのか。

そこで、それらの人と話している場面を思い出してみた。言葉の通じやすい人は、こちらが解らないと見ると、スピードを落としたり、易しい言葉に言い換えたりしてくれる。親切だなあと思ったものだ。逆に通じにくい人は、そういった工夫をしてくれない。むしろ、なぜ中国語を理解できないのだ、という感じだった。

はっとした。外国語を学んだことがあるかどうか、そこに秘密があるのではないか。想像するに、外国語を学んだことがなければ、ゆっくり話す、言葉を選ぶといった工夫は思い付かないだろう。それどころか、自分の母語を話せない人間がいるということさえ、受け容れられないかもしれない。外国語の学習には、母語を相対化し、相手の立場に立つための想像力を養う効果があるのではないか。これが教養ということか、と思った。親切かどうかではなく、想像力の問題だったのだ。

言葉の不自由な異国にて、そんなことを考えた。



粘りの先へ

荒川 洸一

二年前期は、盛りだくさんで、忙しすぎて最後は鬱になるくらいだった。オリキヤンスタッフ、展開研究論文・ポスター制作、夏の短期留学。それに友達と企画した旅行、夜勤のアルバイト。飛翔、酒まつり実行委員会に取材もした。なにやら普段やらないことに挑んだ、果敢に攻めた、攻メスターだっ

た。充実感や楽しみや成長がた
くさんあって、本当に良かった。
た。

ただ、なんでもすらすらでき
たわけじゃなかった。一つ一つ
決めるのも困ったし、計画的に
行うこともすごく難しかった。

思うように行かないことがたく
さんあったし、これらに挑んで
失ったものもある。少し疲れた
というのも本音。強固な自信が
ついたわけでもなく、何をする
にしてもいまだに不安だし、怖
いし、迷う。なんか泣きたくな
るし、いらだつし、焦る。自分
に前向きに過ごせていると思っ
たのに、すぐに自分の小ささば
かりが気にかかる日々が続くこ
ともある（もっとポジティブに
書くつもりだったんだけどな）。

ながながと愚痴りながらも、
今もなにかしら挑戦している。
うまくいく日もあれば、うまく
いかなくて落ち込む日もある。
楽しい日があれば、つらい日も
ある。そんな毎日を相変わらず
過ごしている。悔しく思っ
ては、ただただ粘って過ごす。卑

怯に逃げることもたくさんある
けど、逃げてはやり直し、逃げ
てはやり直す、そんな生活であ
る。粘り強さだけが磨かれてい
くように感じる。ただただ、粘
り続ける。意義も意味もわから
ないけど、自分のしたいことに
挑戦しているからか、とにかく
粘る日が今日も続く。とにかく
あきらめずにやりたいものであ
る。うっそうとした雲を振り払
い、すがすがしい空を見たい今
日この頃である。

